

## 神学論争と人類学

片岡樹(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

本報告の目的は、キリスト教神学における近年の論争を人類学にとっての問題として読み直すことで、人類学におけるキリスト教論の可能性を考える点にある。世界の諸宗教のなかでも、特にキリスト教は人類学と特殊な関係をもちつづけてきた。人類学理論は、特にその草創期においては、キリスト教徒社会をデフォルトとし、そこからの差異をもって世界の諸文化、諸宗教を記述するという傾向を有していた。そうしたなかでキリスト教そのものを宗教人類学の対象とすることは、ごく近年に至るまで立ち遅れてきた。また宗教人類学においては主に実践面が重視され、また、宗教カテゴリーにおけるキリスト教バイアスの除去が長らく課題とされてきたため、結果的に人類学の宗教論、キリスト教論は、キリスト教神学に意識的に背を向けて形成されてきた面がある。しかし近年のキリスト教神学における論争のいくつかは、文化相対主義や実践者の視点を重視する人類学の問題意識に大幅に接近しつつある。そうした状況のなかで、我々人類学者も「神学者ではなく実践者の視点を」という紋切り型の説明にもはや安住できなくなっているのではないか。神学者の問題提起のなかには、人類学者と共有すべきものが多く含まれているのではないか。これが本報告の背景をなす問題意識である。

本報告で主に取りあげるのは、宗教多元主義および土着化神学をめぐる論争である。宗教多元主義というのは、諸宗教の本質的対等を説く立場であり、キリスト教神学においてそれは、キリスト教の唯一性、絶対性を放棄する主張を伴っている。この宗教多元主義からは、現代の人類学にとっての教訓をいくつかひきだすことができる。第一に、諸宗教の掲げる命題は等しく真である、とする積極的相対主義に踏み出すと、逆に、諸宗教の掲げる真理を無視するという皮肉な結果がもたらされてしまうという点である。つまり相対主義は絶対主義を共感的に理解しうるのか、という根本的な問題である。第二に、相対主義の立場からすべての宗教を無差別に肯定するとすると、「何でもあり」のニヒリズムに陥ってしまう。この問題を避けるために、一部の神学理論は「被抑圧者の優先的選択」という立場をとるが、そこからは、特定の啓蒙主義的立場から一方的に既存の諸宗教を採点するという帰結が避けがたくなる。第一の問題は、人類学の文化相対主義につきまとう根本的な問題と同じであり、また第二の問題は、ポストコロニアル人類学が落ち込んでいった隘路と同じ困難を示している。

本報告のもうひとつの話題は、土着化神学をめぐる論争である。これは世界各地のキリスト教の実践面における多様性を評価し、西洋モデルの普遍性に打撃を与えようとする運動だと言うことができる。そこにみられるのはキリスト教の複数性の認識であり、他の宗教的伝統との接触によるジンテーゼを積極評価する姿勢である。これらは一見してわかるように、実践キリスト教をめぐる人類学者の問題意識とほとんど同じである。いやむしろ、土着化の問題については、むしろ人類学者の方が神学者に比べナイーブかもしれない。西洋キリスト教自体がデフォルトではなく土着化の産物なのだという事実はまだ切っ先が届いているのは神学者であるのに対し、人類学者の方が「西洋のオリジナル」対「『現地』の変型」というナイーブな二分法を再生産する傾向が強いのである。

このように考えてくると、本来ならば人類学者がフィールドで考察すべき問いの大部分が、神学者によって行われてしまっていることに気づく。その上で、人類学者の側もいくつかボールを投げ返すことができるように思われる。ひとつは実践の場で間違いなく持続している排他主義の問題である。先進的神学理論のラディカルな挑戦は、そうした知的エリートのリベラルな理論武装に「ついて行けない」平信徒を大量に生み出すはずである。そこからは「住民の視点から」の宗教理解にいまいちど立ち戻るための方法を再検討する必要が生じる。もうひとつは、「一神教徒の民族誌」はそもそも可能なのか、またいかにして可能なのか、という問いである。現場の人々がリベラルな神学者ほどには一神教ドグマを放棄していないとすれば、そうした宗教実践を共感的に理解しつつ、なおかつ文化相対主義への視点を損なわない接近は可能か、という古くて新しい問いが手許に残されるのである。

【 一神教、キリスト教、文化相対主義、土着化 】